

氏名（本籍）	佃 志津子		
学位の種類	博士（生涯発達科学）		
学位記番号	博甲第	9889	号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	がん体験者の「生きる力」をふまえたがん教育の展開 —高校生・大学生を対象として—		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	大川 一郎
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	藤生 英行
副査	筑波大学教授	博士（人文科学）	安藤 智子
副査	目白大学教授	博士（医学）	小池 眞規子

論文の内容の要旨

佃志津子氏の学位論文は、がん体験者の「生きる力」について実証的検討を行なった上で、それらの成果を踏まえて高校生、大学生を対象としたがん教育プログラムを開発し、その効果の検討を行なったものである。その要旨は以下の通りである。

第 1 部では理論的検討として、著者は、「がんという病いの体験」について、がんと社会、生涯発達におけるがん体験の意義、がん体験者の肯定的な変化、苦悩に適応・対処する力等の観点から先行研究を概観し、その整理を行い、課題等を明らかにしている。また、「高校生・大学を対象としたがん教育」について、我が国のがん教育の背景、高校生・大学生を対象としたがん教育に関する先行研究を概観し、その整理をおこない、課題等を明らかにしている。その上で、①先行研究で明らかにされていないがん体験者の肯定的な変化、および、変化に関連する要素について、具体的かつ多様な要素を捉えること、②がん体験の複雑さや多様さをふまえた要素間の相互作用を捉えること、③これらの結果をふまえ、がん体験者が様々な出来事や苦悩に対処し、折り合いながら「生きる力」について考察することを、がん体験者の「生きる力」に関する研究の目的とすると述べている。さらに、高校生・大学生を対象としたがん教育について、①個別性と多様性をもつ人が現在の社会の中で直面する様々な課題に対し、どのような内的・外的資源を動員して対処して生きているかを伝えること、②人間の持つ対処力や変化の可能性を示すことは、教育の場において、他者の経験という認識にとどまらず、自らが直面する課題への対処や、社会の中でどのように生きるかといった「生きる力」を涵養する機会に繋がると考え、プログラム開発にあたっての方向づけとすることを述べている。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部での「生きる力」についての理論的検討をふまえ、実証的研究(研究 1～研究 3)を行なっている。著者は、その結果、①がん体験者の肯定的な変化とそこに関連する具体的かつ多様な要素が概念化されたこと、②円環的な相互作用のプロセスが示されたこと、③がん体験の様々な出来事や苦悩との折り合い方が明らかにされたことを述べている。また、がん罹患による苦悩や不確実さのなかで、内的・外的資源に手を伸ばし、バランスを保ちながらがんになった自分を社会の中に再び位置づけていくことや、新たな自己を生成・発展させていく力や自ら「変わりたい」と望む意志を示した「変化への希求」のカテゴリーは、自らの持つ力を発動させていく鍵となる要素と考えられることと述べている。そして、これらの成果を踏まえ、がん体験者の「生きる力」を「がんに伴い生じた様々な危機や苦悩のなかで、環境（人・情報・場など）との相互作用から、様々な

思考と感情の体験を繰り返しつつ、自らを保ち、あるいは、再構築し、変化を続けながら生きる力」と定義し、第Ⅲ部のがん教育の展開に向けて、①他者理解の幅を拡げる、②社会的な視点を育てる、③一人の存在の価値への気づきを促す、④がん体験者の生きる力 からがん教育を受ける生徒自身の生きる力を涵養する、ということプログラム開発の際のポイントとすることを結論づけている。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部での研究の成果を踏まえ、高校生・大学生を対象として開発したプログラムの実施と効果検証を行なっている（研究4～研究6）。その結果、高校生に対しては、講義プログラムの効果としてがんに関する知識と理解の向上が認められたほか、他者理解の姿勢や支え合って生きることの大切さ、自分の生き方への姿勢などの教育効果が認められると共に、「生きる力」を高めることがうかがえたと著者は考察している。大学生に対しては、講義プログラムの効果は、学習内容の理解に留まらず、学習する意義を考えるとともに自分や社会の課題を考え、今後どのように活かしていくかを思考する大学生の姿勢がうかがえたと著者は述べている。また、演習プログラムの効果は、実践力の育成に向け、大学生自身が教育の担い手として伝える側になることを意識化することにより、健康と命、生きることなどを伝える難しさを知る経験の意義と価値をうかがうことができたと述べている。

最後に、第Ⅳ部の総合的考察で、著者は本研究のまとめを行い、がん体験者の生きる力を踏まえたがん教育の効果、その価値、今後の課題と展望について考察している。

審査の結果の要旨

（批評）

著者は、がん体験者の生きる力に焦点をあて、生きる力とは何かということ明らかにし、その知見を踏まえた上で、高校生、大学生を対象としたがん教育プログラムを開発したことに大きな独自性がある。

これまで高校生に実施されているがん教育は、厚生労働省や文部科学省による指針やがん教育推進のための教材、そして高等学校側の要望をふまえながら行われてきているが、知識が偏重される傾向があった。本研究は、現在求められているがん教育の枠組みを遵守しながら、そこに、本研究の独自性であるがん体験者の「生きる力」に関する要素を加え、「がんと社会」「がんと心・がんと生活」「生きる力」の3つの領域からなるプログラムを開発し、その効果も実証している。このプログラムが、これからの高校生や大学生を対象としたがん教育に与える影響は大きい。また、著者が明らかにしたがん体験者の生きる力について、がん体験の複雑さ、多様さ、支えとなる存在の価値が改めて確認されたことに加え、「折り合う力」というこれまでの研究で焦点化されることのなかった概念も抽出している。今後のがん体験者の心理的理解に大きく貢献する新しい知見が得られたということがいえよう。

2021年1月26日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（生涯発達科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。